

編集後記 西村俊

Editorial Postscript

Shun NISIMURA

コロナ過を起点とした非対面・非接触に偏重した日常から beyond コロナへの歩みを進めて更に 1 年。人と対面で会話する際の精神的な負担は段々と低減され、相手がマスクをしていない状況で挨拶から始まる機会も増えている。コロナに対する日本社会における寛容さの広がりや日常への歩みを後押ししている。コロナ過で急激な社会実装と認知の機会を得た様々なオンラインツールは対面以外での議論や交流をサポートするツールとして受け入れられ、大学・企業の説明会や小規模な研究会、個別面談などにも気軽に利用されている。ハイブリッド開催は（人的な負担も含めた）運営コストの観点から縮小されて行きそうだが、完全オンライン開催とする場も存在感を保ち選択肢の多様化をもたらしている。特に子育て世代にとっては日常に居ながら様々なイベントに参加できるオンライン化による機会創出の恩恵は大きいようである。コロナ過を経て、これまでの日常とは異なる“新たな日常”が生まれている。

第 170 回芥川龍之介賞 受賞作「東京都同情塔」では生成 AI が小説に登場し、著者・九段理江さんが ChatGPT との“対話”を執筆活動に活かしたことが話題を呼んだ。日常的に「AI 活用」を耳にする機会も増え、実際に大規模言語モデル (LLM) などを活かしたツールの社会実装も急速に進められている。他方、第 170 回直木三十五賞の受賞 2 作品の一つである「ともぐい」の作家・河崎秋子さんは、禁退出の地元の人々の覚書や漁師の自叙伝などを参考書として執筆活動を行っていたと述べている。新しい技術開発やこれまでの地道な記録・伝承の蓄積の形がそれぞれのニーズに合った“今”の創作活動の多様性に繋がっている。

現代に生きる私たちの価値基準や生活スタイルの変化によって後世に引き継ぐことが難しくなっている技術や記録が増えている。未来での多彩な公益性を想像し何をどのように引き継げるのか、社会の合理化が加速している今、継承のための仕組み作りが必要な時にあると感じている。

民族植物学ノオト 第 17 号 (2024)

ISSN 1880-3881

発行日： 2024 年 3 月 30 日

発行所： 特定非営利活動法人 自然文化誌研究会

発行責任者： 植物と人々の博物館 木俣美樹男・西村俊

所在地： 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

自然文化誌研究会

Ethnobotanical Notes No. 17 (2024)

ISSN 1880-3881

edited by Mikio Kimata and Shun Nishimura (Plants and People Museum)

The Institute of Natural and Cultural History,

3337-2 Kosuge, Kitatsuru-gun, Yamanashi Prefecture, 409-0211, Japan